奈良のシルクロード ―「愛」を運んだ道―

私が所属している奈良県立大学は「シルクロード」に面している。

もちろん所在は奈良市船橋町の10番地、長安でも敦煌でもなければ、サマルカンドでも、バグダードでもローマでもない。駱駝に乗ったキャラバンが旅の疲れを休めたオアシスがあるわけでもない。

古代、ユーラシアの各地の文物は、シルクロードを通って奈良の都（「平城京」）にもたらされた。平城京の宮内で聖武天皇に愛用された品々は、没後、光明皇后によって東大寺毘盧遮那仏（「奈良の大仏さま」）に献納された。今に言う正倉院宝物である。

その献納に使われた道が、奈良県立大学の正門に接しているのである。試みに地図などで位置関係を調べてみると、平城宮から東大寺大仏殿までの距離は約4キロメートル。平城宮・奈良県立大学・大仏殿の南北の乖離は―測り方にもよるが、私の調べではざっと―5メートル、乗用車一台分も離れていない。

この東西一直線に引かれた条里制の道を、見るたびに亡き夫（聖武天皇）が思い出されて泣き崩れると記された遺愛の品が、1264年前の6月、大学正門前を通り過ぎていたのである。

ユーラシア大陸のシルクロードは、イメージに浮かぶ単一の「道」とは違って、大陸を横断する3つの幹線と、そのルート上の各都市が南北に結びついた「メッシュ」状のネットワークだった。また、東西数千キロに及ぶ長安～ローマ間は、単一のキャラバンによるものではなく、言葉の通じる範囲での中継交易だった。荷物の受け渡しが行われるところにキャラバンサライ（隊商宿）がつくられ、街や都市に発展し、その地の文物も交易品に紛れ込んで、絹や宝石、貴金属品、香料に混じって、薬品もまた東西に伝わっていった。

奈良の「シルクロード」で運ばれた宝物にも、60種の薬品が含まれていた。献納目録の「種々薬帳」には、全面隙間なく天皇の御璽が押され、その末尾に光明皇后の言葉で、「病に苦しむ人が、この薬で苦しみから救われ、幼くして亡くなることがないように願います」という意味の言葉が記されていた。その皇后の願いどおり、この薬は、何度も病人の救済に用いられた。

大仏さまに限らず、神仏にいったん捧げられた品は、その瞬間に誰のものでもなくなる。神仏からの賜り物だから、気兼ねせずみんなで使える。好んで病を得る者など、いない。仏教の基本コンセプトが、病める者・弱き者・少数の者に寄り添うことだからこそ、聖武天皇は仏教に帰依し、あらゆる衆生を慈しみ、災異のときには食糧を与え、医療を施した。そして「無限の光」を象徴する巨大な毘盧遮那仏を造り、「何も怖がらなくていいよ」と励ます「施無畏印（せむいいん）」を、その掌に象ったのである。

この大仏造立に込めた聖武天皇の「愛」は、一直線に光明皇后の薬品献納の「愛」に結びついている。奈良県立大学の正面を通る道、平城宮と東大寺大仏殿を結ぶ奈良の「シルクロード」のように。（了）